

私は博物館学を専攻しており、外国の博物館について知りたかったのと、異文化・多文化教育にも以前から関心があったため、学内でチラシを見つけた時には参加を即決した。海外は 2 度目で不安もあったが、ちょうど偶然友人も参加を考えており、一緒に参加することになって非常に心強かった。どのプログラムも充実した時間を過ごすことができたと思う。海外の大学や高校の授業を見学することは、旅行などではまずできないため、日本との違いを知る貴重な経験になった。

事前の学習会でメルボルンの移民に関する情報を集め準備していたため、現地の活動では学びをより深められたように感じる。特に横浜の移住資料館への見学は、移民について知る第一歩となり、またメルボルンの資料館との違いを比較する上で、非常に貴重な経験であった。

日系移民の人たちとの交流も、今までにない体験であり、これまで身近に感じることのなかった移民という存在について考えさせられたのと同時に、日本において移民教育が十分に為されていないという事実初めて目を向けることができた。海外からの日本への移住者が今後も増えていくだろう中で、かつての移民の歴史や彼らの現在について知ることは、多文化共生を実現する上で非常に意義のあるものである。今後は、個人的にも移民についてもっと知りたいと感じた。メルボルン州立美術館での館内ツアーやワークショップもとても印象に残っている。言葉が通じないからこそ、アートをツールに互いを理解し合うことの重要性を認識し、改めて芸術の奥深さや可能性を感じることもできた。

英語が分からないため、先生方のお話を理解することができず、もどかしさを感じた場面は多々あったが、これから英語を学んでいくための糧にしたいと思う。留学前は、言葉が通じないということに対して大きな不安を抱いていたが、異国の地で何も分からない私たちに対して、プログラム先の先生方や生徒、店の店員や街を歩き交う人々までもが、非常に親切にしてくれた。初めて会った人や、電車やバスで居合わせたただけの人でも、気さくに話しかけ、笑いかけてくれる様子に、日本の日常との違いを感じた。相手に関心を持って関わろうとすること、分かろうと努力することで、たとえ言葉が通じなくても、何かしらの形で相手に伝わり、一緒に笑い合うことができるということ、身をもって体感した。

またジョン・モナシュ高校の生徒たちとの交流は大きな刺激になった。3 年生のときから日本に興味を持ち、日本語を一生懸命に学んでいる生徒の様子を見て、自分もこのままではいけないと思った。質問の数が非常に多く圧倒され、彼らの学ぶことに対する積極的な姿勢を見て、普段の自分を振り返るきっかけにもなった。学生のころから視野を広く持ち、他の言語や文化に臆せず挑戦する姿は本当に尊敬する。機会があれば、ぜひまた訪問して話をしたり、ワークショップをしたい。